KSKS 花の会ニュース

２０２３年１０月号
no.198

編集人／ 社会福祉法人 花の会　広報委員会 連絡先／ 〒569-1042 高槻市南平台 3-29-9
TEL 072-692-2859　FAX 072-693-3603
★WEB　https://hananokai.info/　★E-mail　hana-net@minos.ocn.ne.jp

２０００年１２月１２日第三種郵便物承認　毎月（１・２・３・４・５・６・７・８の日）発行
発行人　関西障害者定期刊行物協会　大阪市天王寺区真田山町２－２　東興ビル４階　定価１００円

障害理解のリフレクション

去る、7月31日に立命館大学の立岩真也さんの訃報が伝えられ、大きな喪失感を味わっている。8月は、メンバーの一周忌のことを書くつもりでしたが、60歳代の知人の研究者の悲報があり、長い付き合いのご家族が生涯を終えられたとの連絡、暑さとともに辛い夏を過ごした。

花の会も40年を迎えて、振り返る機会が増えている。「理念継承」をテーマに研修を進めている。エピソード記述もここ何年かの課題で、相乗効果も期待している。先日のピープルファースト全国大会には、全国、海外から1200名が大阪府に集まった。確かに、イベントや事業の規模は年々(コロナ禍を挟みつつも)拡大していくことが想定される。法改正も来年、実施され、目まぐるしく変化する時代となっている。これらの評価は、一旦置くとして、メンバーや家族、支援スタッフの生活の在り様は、どのように変わったのか、変わらないのか、常に問われることではあるが、忘れてはいけないことだと思う。

法人の「理念」を伝えることの「困難さ」を自覚させられる日々ではあるが、理念なんかをいじっていると、やたらと横文字文化の世界にぶち当たる。堀智晴さんとオープンダイアローグの話をしていて「リフレクション」(振り返り)という場面が大切だと気付かされた。本当の障害理解とは何か、真っ向から攻めなくてもいいが「障害理解のリフレクション」(佐藤貴宣、栗田季佳編 ちとせプレス、2021)という本に出合った。内容は紹介できないが、サブタイトルは「行為と言葉が描く〈他者〉と共にある世界」となっている。素敵なネーミングだと思った。十分、消化できてもいないので、お伝えできないのが残念ですが、日々、現場で繰り広げられるエピソードや「支援」と思っていることを振り返るのに、いろいろなヒントとなることがちりばめられている。

困ったときは藁をもつかむ、ではないが、現場はいろいろな情報に翻弄され、途方に暮れてしまっているのではないか。でも、藁はとても大切なことのように感じている。

（やまだのかかし）

石山 法子さん

「自分が楽しい」と思えることを選べるようになってほしい

石山 法子さんのプロフィール

放課後等デイサービスをご利用のＩさんのお母様

- 高槻生まれ、高槻育ち
- Ｉさんの学校卒業後の進路のことを知るために、就労継続支援Ｂ型の事業所で働かれています。
- 趣味は、Ｉさん小学校支援学級時代のママ友と飲むこと。（定期的に開催中）

今回は石山法子さんにお聞きしました。

※利用されている子どもさんのことを“Ｉさん”と呼ばせていただきます。Ｉさんは現在、摂津支援学校中等部2年生。小学校は地域の学校に行かれていました。ダウン症の男の子です。

Q 子育てで大切にされていること、Ｉさんの将来について考えておられることなどをお聞かせいただければと思っているので、よろしくお願いします。

石山： 分かりました。（笑）

Q 最近Ｉさん、できることが増え、自信がついてきたように思うのですが、学校やお家で変化などありますか？

石山： 授業では、モジモジで頑固なところが出て、運動会も参加しない‥けど、先生はスムーズに動いていると話す。先生はＩの気持ちを考えて引き出そうとしてくれているようで、そこがいいのかもしれないですね。学校は楽しいようで、時間になったら家を出発しています。（笑）

Q なるほど、おうちの方ではどんな様子ですか？

石山： なかなか。（笑） 駆け引きですね。何が嫌なのか、どうしてできないのか‥。すぐに動かない理由について一緒に考え、また関わってくれている人と共有するようにしています。周りの人も考えるけど、Ｉ自身も考えてほしい。それが将来、自分で考える力をつけていくことにつながると思っています。

Q 将来につながる‥考える力、なるほど。しかし駆け引き、難しいですよね。

石山： そうですね。でも繰り返しだと思います。その時、気が付かなくても、何かのきっかけで気付きにつながることもある。親もＩと一緒に勉強ですね。

Q 先々まで考えておられる石山さんですが、Ｉさんの生活について将来的なイメージ、持たれているのですか？

石山： グループホームで生活するようになるのかな‥。利用開始時だと部屋はどうか、一緒に生活する方々（支援者、同居の方）はどんな人なのか‥とか、高齢期に差し掛かると生活の困難さが、認知症からなのか、障害に起因するものなのかなど、分からない状態の時に受け入れてもらえるのか‥‥とか、考えてしまいますね。

Q なるほど‥。

石山： 日中活動の場は、今の制度上であれば生活介護か、就労継続B型か‥。B型はしんどいかな‥とか考えてるんですが、じゃあ、今できることは何かなーと思って。

Q 今できること？

石山： 時間はかかるだろうけど、移動手段を広げたいと思っていて‥‥、電車・バスなどの公共交通機関を一人で利用できるようになり、自分で行ける、一人で行動できる、判断できるようになれば、事業所への通所だけでなく、自分の行きたいところに行けるようになるかなと思って。

Q 安心だからと思うのですが、送迎車を利用される方が最近は多いイメージがあります。

石山： そうですよね。移動手段としては車の方が安心かもしれませんが、私が車の運転ができないということもあるのですけど、できるだけ公共交通機関を使っていこうと思って。電車・バスのような「箱」の中にいるのは苦痛な人も多い。経験を積めれば自信になると思うんですよね。例えば電車に乗るとして、Ｉは漢字の理解は難しい、ひらがなも‥うーん。（笑）ですが、文字を合わせることはできる。それを手掛かりにして、あと「困った時は駅員さんを頼る」ことができればいいかなーと思っています。金銭管理はもう、「ピッ」（電子決済）で。（笑）

Q もう取り組まれてるんですか？

石山：ガイドヘルパーの方と一緒に練習中で。駅員さんに話しかけていい、助けてくれるよ、ということを経験しているところです。

Q そうなんですね。最近はお出かけ、どこかにされたんですか？

石山：この前　神戸の方に行ったんですが、ヘルパーさんと行ったモザイクの商業施設の中やアンパンマンミュージアムまで案内してくれたんですよ。自分の好きなところに行けるという自信を積むことで、よし！行ってみようと取り組んでくれるかなと思って。親としても、「経験をさせている」という経験がないと手離せないというか・・。心配もあるんですが、まぁ何とかなるかと。私がしなくても、お父さん（Ｉさんのお父さん）がどんどんＩにやらせていくので。（笑）とりあえず、高校卒業後、放課後等デイがなくなった時、余暇活動でダンス教室に電車、バスで行き、帰ってくることが今の目標かな。

Q なるほど。勉強になります。（笑）

石山：いろいろ思い描いてチャレンジをと思うのですが、本人のイメージと違う、納得できないことがあれば、変えていく必要も感じるかな。無理強いが通じる相手でもない。様子を見て手を変え品を変え・・。（笑）

Q さきほどお父さんの話が出ましたが、どんどんやらせていくとは？

石山：Ｉが幼い頃、意思疎通がうまくできないことで、「何を言っているのか分からん」と言って、あまり関わらなかったのですが、Ｉのコミュニケーション力の成長、また一緒に過ごす中で、言葉的にも、感覚的にも理解できるようになって、お父さんが変わったと思うんですよ。ある意味、一人の人間として対等にというか、話をするんですよね。まぁ親が理解しようと思うのは当然だと思うですが、Ｉにも理解を求める。できるやろ、やってみろ、みたいなところもあって。（笑）　やり取りを見ていると、Ｉがどのように振舞えばいいのか考えている。以前はＩにとってお父さんは怖い存在だったけど、一緒に過ごす中で、お父さんのことを理解して、自分なりに対処できる方法が分かってきた。あとは言葉で気持ちが伝えられればと思っています。

Q 言葉、コミュニケーションにおいて、何か意識されていることはありますか。

石山：Ｉは、言葉は不明瞭、字を読むのも苦手。表現は難しいことはありますが、場面に応じて今はツールを準備しています。音と文字をマッチングさせる。あと文字と言葉の発話を合わせていくなど。Ｉの課題ではなく、こちら、関わる側の問題と思っています。

Q いろいろお聞かせいただいて、ありがとうございます。最後に、子育てに悩んでおられる方にメッセージをお願いしたいのですが。

石山：私がですか？（笑）　そうですね・・、メッセージになるか、私が考えていることでいいですよね。

Q ええ、お願いします。

石山：私は「こうなってほしい」というのを、あまり考えていなくて。「この方が楽しいんじゃないか、楽しめることを増やしていこう」という関わり方なのかな。一人ひとり成長のスピードもできることも違いますし、別に勉強も・・楽しむために必要であれば、ですね。自分がしんどいことはしない、でいいんじゃないかな。

Q 福祉に対しての思いとか、何かありますか？

石山：そうですね・・、福祉の力は必要だと思いますよ。私の捉え方としてはお守りみたいな感じかな。あと福祉サービス、「サービス」という言葉。何だか使わないと損・・みたいなイメージがあって。目的がないと意味がないですよね。例えば事業所、放課後等デイサービスは社会の縮図、疑似社会だと思っているのですが、目的を共有化する作業が大切で、個性、いいも悪いも、失敗も受け止め、経験する所というイメージ。今は一緒に子育てをしている感じですね。できないことに目が行くとＩも自分もしんどくなるじゃないですか。私は福祉や医療関係者いろんな人の話を聴いて、楽に考えられるようになったかな。

インタビューを終えて

本当は、もっとたくさんのお話を伺ったのですが、紙面の都合上、抜粋させていただく形になりました。貴重なお話ありがとうございました。

（さくらクラブ　平田昌史）

嶋田 由貴子さん　～いろいろな方に出会い、助けられ ～

嶋田 由貴子さんのプロフィール

◉親の会の作業所をつくり、家族が職員として活動。

娘 妙さんについて

◉ 1993年から共働舎花の会、1999 年からグループホームを利用されています。

◉2022年末に新型コロナウイルスに感染し、8か月入院され、東大阪、八尾市の病院3か所を転院して頑張られていました。
現在は退院されています。

◉妙さんの入院期間中に献身的に関わられましたが、腕を痛められリハビリ中のため、グループホーム「でいじー」で妙さんと会われるのを楽しみにされています。

ご家族へのインタビュー、今回はグループホーム「でいじー」と、日中は共働舎花の会をご利用中の嶋田妙さんのお母様にお話をお聞きしました。

Q 花の会ご利用以前の妙さんの生活状況について、お尋ねします。

嶋田：15歳から18歳まで府立の養護学校に在籍し、18 歳から 23 歳までつきのき学園にいた。つきのき学園では、陶芸の作業と製品の販売をしていた。本人は楽しく生活していたと思う。当時は、高槻駅西口までは私が同行していたが、西口からつきのき学園までは妙が自力で市バスに乗り通っていた。

妙が23歳になって以降は、皆で親の会の作業所をつくり、保護者自身が職員となり一緒に行動していた。8時30分から16時までで、ものすごく疲れたし大変な思いもしたけれど、楽しかった。

そのような生活をしていたが、腰痛など身体が辛くなり、このままでは自分自身が持たないと考え、親の会をやめるに至った。

そこからは妙が在宅の状況となったが、たまたま妙の中学校の同級生で仲良くしてくれている男性が花の会でバイトしていて、山田さんへ紹介してくれ、花の会利用につながった。現在もその同級生とは仲良くしていて、良い人に巡り合えたと思っている。

Q 花の会を利用し始めた当初の思い出などありますか？

嶋田：氷室では、畳の上で内職をしていた。当時は給食などないので毎日、妙と一緒に朝7時30分のバスに乗り弁当を持って出発していた。当時は送迎もなかったので、私自身送迎だけでいっぱいになっていた。そんな中でも思い出に残っているのは、バザーです。みんな一生懸命にやっていた。トラックで荷物を持っていき、商品を夜間に盗られないように職員が寝泊まりして番をしていた。あとはハワイ旅行も妙にとってはいい思い出になったと思う。ただ、私自身は入って間がないこともあり、肩身が狭く気を遣っていた。

その後、「はなぽっぽ」ができ、移動となってから、楽しい思い出がたくさんありました。お母さんたちとのつながりもこの頃から始まった。家族に活気があり、職員も家庭的な人ばかりで楽しかったし大切にしてもらえたと思う。募金活動やいろんな祭りへ顔を出して、店も出店した。相当にいろんなことをしたと思います。山田さんの車に乗せてもらい、みんなで大阪のミナミへ行き、景品なんかを買いに行ったこともありました。皆でワイワイと家族的な空間で良かったです。

共働舎花の会ができ始めた頃から、家族も高齢化が進み、作業所に顔を出すことが減った。ちょうどその頃、妙が他法人のショートを利用していたが、寝ない、食べない、入浴しない状態が続き、これは何とかしないと大変なことになると思い、山田

さんへ相談した。そのような経過でグループホーム「オリーブ」での生活が始まった。最初は妙がグループホームに行くことを嫌がり、隠れたりして、行こうとしなかった。それでも徐々に慣れていき、都度泊数を増やすことで、今のような３６５日利用につながった。妙がなかなかグループホームの利用につながらなかった要因として、私自身の決心が大きかったと思う。妙のグループホーム利用日数を増やしていった頃は、主人の体調が悪くなり、私自身がみないといけない状況になった。とてもじゃないけど、主人と妙の両方をみていくのはできないので、私の中で、妙をグループホームに預けようと決心がついたのだと思う。ずっと一緒に生活してきた親子なので、離ればなれになるのは正直、淋しい。一緒に居られるのであればずっと一緒に居たいと思うし、何かしらのきっかけがなければ、グループホームに預けようと決心がつかないのではないかと思う。

Q 花の会を利用して、妙さんの変化などあったら教えてください。

嶋田： 妙が一番変化があったなと思うのは、はなぽっぽ時代に友人をつくったことが大きかったと思う。いつも一緒に行動し2人で楽しくしていた。ところが、友人が別のメンバーと仲良くなり妙とあまりしゃべらなくなると、妙が「はなぽっぽへ行かない」と主張するようになった。人の気持ちを感じたり、気持ちの伝わりなどが育まれたんだなと思う。自分から話せなくても、行動で意思表示したりといったことができるようになったと思う。親と1 対 1 の関係では、友人の大切さや嫉妬などの感情を経験することが乏しくなるので、妙が花の会を利用しそのような感情を育めたことが、何よりの変化だと思う。

Q 花の会を利用してきて、お母さん自身思うことはありますか

嶋田： 最近のことになりますが、2022 年 12 月末に妙がコロナに感染し2023 年の8月まで入院していたことがすぐに頭に浮かびます。生死をさまようこともあり、また気管支切開をしてその穴が閉じられるか分からない時期もあったりと、本当に大変でした。そんな時に、花の会の職員の皆さんが私たち家族と一緒になって動いてくれたり、オンライン面会の際には職員が顔を出してくれたりと、本当に嬉しかった。妙もよく長期の入院を淋しい中耐えたと思う。長期の入院であっても妙が乗りきれたのは、やはりホームでの生活に慣れていたからだと思う。親のいないところで、職員やメンバーと一緒に生活してきた経験があってこそ、長期の入院に耐えられたのだと思う。入院中は本当に家族と花の会との距離が近く感じられ、みんなで一緒に妙を迎え入れることができ、これなら信頼していこうとも思えた。思い返せば妙が花の会利用につながったのも、中学の時の同級生がきっかけだし、コロナ感染での入院中に傍らで寄り添ってくれたのも花の会職員ですし、人と人のつながりの大切さや節目で素晴らしい人と巡り会えた。周りの皆さんに感謝しかないです。

Q これからの花の会に望むことはありますか？

嶋田： 共働舎花の会には、土・日曜日の開所をしてもらいたいです。現状、休日対応はグループホームのみとなっていますが、ガイド利用のないメンバーなど、日中の作業所を開放し、皆で映画鑑賞したり音楽レクをしたりと、刺激のある休日の生活を過ごせたらいいなと思います。

グループホームには、医療センターのようなものをつくってもらいたい。ホームの数を増やすことも大切だと思いますが、これからどんどん医療の力が必要になってくるメンバーが増えると思います。メンバーからすると、普段から付き合いのない病院や医師、看護師との関わりが難しかったりもするので、グループホームにそのような設備が整備されていれば、普段から接している職員だったりするので、メンバーも家族も安心すると思う。

最後になりますが、妙が長期の入院生活を乗り越えられたのは、共働舎花の会での人との関係の育みや、グループホームでの一人の居室で自分で就寝したりといった生活に慣れていたことが大きな要因だと思います。

インタビューを終えて

嶋田さん自身が本当に、その時々に知り合った「人」を大切に想い、そして助けられ、支え合っていることを私自身言葉で聞いて、感慨深いものがありました。

妙さんが長期の入院生活を耐え抜いてきたのも、共働舎花の会やグループホームでの生活が活きているのかもしれません。しかし、それ以上に、お母様が医療スタッフとの関係を深め、お母様の妙さんに対する想いが周囲の関係者にも伝わり、皆で前向きに関われたからこそ、妙さんも頑張れたのだと思います。

（取材：フラワーホーム世話人　座古　修）

河野　一生さん　　職員の声・支援への思い

河野　一生 さんのプロフィール

- 花の会入職 14 年目。
- 共働舎花の会からスタートし、翌年にグループホーム（以下GHと表記）へ異動。12 年間GH部門で勤務され、今年度から管理者としてフォルツァで勤務されています。

今年度当初にGHより就労支援センター　フォルツァへ異動された河野一生さん。甘いもの好きでお菓子をおいしく食べるために、今年からジムに行かれているとか。

今回はそんな河野さんに、部門を越えての部署異動や役職など、さまざまな変化に対して感じていることをお伺いしました。

Q フォルツァに来られてからどれくらいになりますか？

河野：今年の４月からなので、まだ５か月くらいです。

自分は最初は共働舎花の会にいたんです。ちょうどGHも人手不足で募集しているっていう話を聞いたんで、自分から手を挙げて。今回のフォルツァも、管理職の方とサビ管の方が退職されて…。資格を持っている私にもお声掛けいただき、「私で良ければ…」と。

Q 部署が変わる上に管理者としての異動ということで、大変だったのではないかと思います。正直どう感じていましたか。

河野：私は部署が変わることにはそんなに抵抗がなかったんです。「花の会の助けになればなぁ」という気持ちで、話を受けました。しかしやはり勝手が違うので大変だ…と、行ってみて感じているところです。

Q どういった点が大変ですか。

河野：フォルツァのメンバーって、就職したら卒業していきますよね。だから就職が決まったら、新規の利用者をどんどん確保していかなければならないんですが、そういう感覚ってGHの時は無かったなと…。

利用者を増やすためには、フォルツァの職員が一丸となって営業活動をしていかないといけないんですけど、それが本当に難しいなと感じています。自分もやったことがないので、いろいろな事業所や関係機関を回ってはいるんですけど。なかなか成果には繋がっていなくて、手探りでやるしかないかな…と。

あと、高槻市に就労移行（の事業所）がこんなにもたくさんあるということも知りませんでした。この中で、フォルツァとして生き残っていくのは大変なことなんだと身に染みて分かってきた、という感じです。

Q 最初に共働舎花の会に入ったきっかけを教えてください。

河野：親の勧めです。もともと花の会を立ち上げした人と自分の親が知り合いで。自分に福祉の仕事ができるのか悩みながらでしたが、入職してから資格を取得したことで、「やってもいいよ」と背中を押されたような気持ちになれました。

Q これまでの業務で、楽しいと感じたのはどんな時ですか？

河野：支援者としては、一緒に関わってお出かけ

したり、GHでは、一緒に旅行に行ったこととか…。あとは、自分が関わったことでメンバーが少しでも良い方向に変化があると、嬉しいなと思います。

例えば、GHにいた時の話なんですけど、今までガイドヘルパーを使うのを躊躇されていた方に、実際どういう形で使っていくのかとかをお試しで見てもらったり、少しずつ知ってもらうことで、最終的に、「サポートセンター　はいびすかす」に契約してもらえたことがあったんです。

ガイドヘルパーを使って休日にお出かけができるようになったことで、GHでの生活も良い方に変わって…、外出に積極的じゃなかった方が、次のお出かけを楽しみにしていたり。

楽しみが増えたのがすごく良かったなと思いました。関わり続けていくことで、そういう相談を自分にしてもらえたりとか、私からも「こういうのはどうでしょう？」みたいに提案できるようになっていけたことは、良かったなと思います。

Q 苦労したなと思う経験はどんなことですか？

河野：GHでは、苦労したなと思う経験はそんなになかったですよ。もちろんメンバーへの支援に関しては、大変なこともたくさんあったんですけど。

苦労しているのは今ですかね。さっき話していた、利用者を増やすためには～というのが、成果が出ないのと、営業活動が雲を掴むような感じで。すぐに反響が返ってくるわけでもないので…。

Q 事業部を越えての異動で、違いを感じた部分はありますか？

河野：部署異動というよりも、役割が変わったことについての違いを強く感じています。

管理者研修も行かせてもらったんですが、管理職として目線を変えないといけないと教えてもらいました。研修でも言われてましたが、誰でも「自分がやらないと」と思ってしまいがちですが、プレイングマネージャーではチームは育たないそうです。「部下を育てるという意味では、部下を信頼して任せないといけない。」と…。今までやってきたことと、これから求められていることに違いがあるということに気付かされました。

Q 支援で大切にしていることを教えてください。

河野：先ほどの話の延長になってしまうんですが、「自分の意識を変えること」ですかね。

「支援者としてやってきたこと」と「管理者としてやっていくこと」の視点の違いが今の私に必要なことだと思います。管理職としての視点を養い、部下を信頼して任せてみんなでやっていく、という形を作っていきたいです。

Q 今後の目標を教えてください。

河野：フォルツァの職員みんなで、利用者獲得に向けていろんな取り組みを考えたり、実際に動いてもらったりして、みんなで成果を出せるようなチームを目指していきたいと思っています。

研修でも、「役職やリーダーという役割は求められるスキルが違っていて、初めてやるんだから失敗して当たり前です。」と。上手くいってない時こそ飛躍のチャンスと考えると、今の自分はそういう時なのかもしれません。前任の方のやっていた成功例も継承しつつ、自分の色も出していけたらと思います。

編集後記

役職や等級が上がっていくと業務の取り組み方や求められることも変わってくる、というのは、長く働いていく上では避けて通れないことだと感じています。

いろいろ試行錯誤しながらチャレンジされている河野さんのお話は、自分自身にとっても刺激になりました。

（取材：田淵　彩子）

日中活動支援の報告　生活介護

『一 泊 研 修 旅 行』 に行ってきました！

多くのメンバーが楽しみにしている行事が、「一泊研修旅行」です。コロナ禍によりやむなく中止となり、昨年度は日帰り旅行、“今年こそ！”という思いで準備を進めてきました。今年も各班で行き先を決めてもらい、5コースに分かれての実施となりました。

9月に入ると、「一緒に旅行、行こうね！」と声をかけてくれるメンバーも。ウキウキ気分が伝わってきました。

しかし、中には久しぶりの旅行に不安を抱き、「旅行、行かへん。」と言ってきたメンバーも…。不安に思っていること一つひとつを解消できるようワーカーと話し合いながら、何とか旅行に参加することができました。彼に、旅行の感想を聞いてみました。「もう忘れた。」と言いつつ、「演歌（カラオケ）、お風呂（温泉）がよかった。それと、ごはんおいしかった（宴会での豪華な食事）、寝た（ホテルで班メンバーとの宿泊）。楽しかったわ。来年も行きたい。」とのことでした。

直前でコロナウイルスに感染してしまい、急遽参加できなくなったメンバー、ワーカーが出てしまったことは残念でしたが、久しぶりの旅行で、お互い少し距離も縮まったのではないでしょうか？私は、メンバーと昔話に花が咲いたり、いつもと違う生き生きとした表情を見させてもらって、元気をたくさんもらいました。

さあ、みんな来年はどこに行こうか？

（共働舎花の会　山口　由美子）

『 販 売 活 動 』、 再 開 し て い ま す

コロナで販売活動を自粛して3年。2023年、ようやく販売活動が再開し始めました。学校の職員室での販売活動を再開するにあたって、事前に販売活動の許可を再度行いました。なんと9割近くの学校が販売活動の再開の許可をしてくださいました。

花の会のさをりグッズ
「ネックストラップ」

花の会の販売を心待ちにしてくれていた、あるエピソードです。

学校へ販売に行くと、一目散にさをりグッズを見始めた一人の先生。その先生は、花の会のさをりグッズ「ネックストラップ」を付けておられました。3年間使い込んだネックストラップを別のものに変えようかと悩んでいたが、やはり花の会のネックストラップが欲しいと思い続けていたとのことでした。念願のネックストラップを購入した先生は、とても喜んでくださいました。

販売活動では、新しく藍野大学への販売、たかつきまるしぇへの出店などが増えています。

これからますます活発に販売活動をメンバーと一緒に頑張っていきます。

（共働舎花の会　大久保　美代子）

児童通所支援の報告

動画配信「高校卒業後の進路を考える　～選択肢の１つとして福祉サービス編～」について

児童部門では昨年度、水仙福祉会（アイ・サポート研究所）の岩崎先生、田代先生をお招きし、「本人主体の支援を考える」と題して公開研修会をオンライン（ZOOM）で実施しました。当日、花の会児童部門を利用されているご家族、他法人の児童発達支援事業所の職員の方等、多くの方にご参加いただきました。

今年度は、「高校卒業後の進路を考える　～選択肢の1つとして、福祉サービス編～」を実施します。前回はリアルタイムで行いましたが、今回は動画配信（お申込みいただければ、期間中いつでも視聴可能）を計画しています。

事前に参加の有無、尋ねたいことなどをお聞きして、それを踏まえた内容で配信を予定しています。ご家族の方は「まだまだ先の話」「まずは（進学）進路の問題」等、一人ひとり考えておられることは違うと思いますが、少しでもイメージをつかんでいただくために、花の会の活動を例にしながら、さまざまな障害福祉サービス（例：生活介護、就労継続・移行支援、グループホーム、ガイドヘルパー）、そして手帳がない方も利用できる、三島地域若者サポートステーション（厚生労働省委託）のことについて、情報発信できればと思っています。利用者の方だけでなく、どなたでもご興味のある方は参加いただけます。

QRコードを読み込んでいただき、お申込みください。後日URL等お送りいたします。配信は、12 月1日以降を予定しています。ご不明な点は、さくらクラブ（072-674-6790　平田）へお問い合わせください。

（あじさいクラブ　石橋　洋平
さくらクラブ　　平田　昌史）

今年の夏休みを振り返って

今年は、コロナウイルスの感染症上の位置づけの変更（5類）、そして以前に比べると感染の広がりが落ち着いてきたこともあり、児童部門3事業所とも、長期休暇での活動（10:00～17:30）の選択肢を広げることができました。子どもたちの意見を取り入れつつ、行き先、内容を検討し、室内施設（工場見学・体験）での活動、高槻出灰（いずりは）で川遊び、開放的な野外プールでの水遊び等を実施。楽しい思い出をたくさん作ることができました。一方、コロナ禍で人数制限や事前チケット購入で意外にゆっくりできたことが、以前の状況に戻りザワザワしたところにストレスを感じる子どもたちが過ごしにくくなる・・という、規制が悪いことばかりではないなと感じることもありました。多くの子どもたちが「また〇〇（楽しかった夏休みの活動）したい」と、人気のあった活動については早くもリクエストが上がっています。普段、放課後等デイサービスを利用している子どもたちは、学校終わりに事業所に来られるので、ゆっくり遊ぶ（過ごす）ことができませんが、短い時間でも楽しく、また多くの経験ができるように活動内容、環境を工夫し取り組んでいきたいと思います。

（あさがおクラブ　古谷　由紀子）

感染症対策・・・

昨年度はコロナへの用心（対策）として、念のためと、休まれる方が多かったと思いますが、この8月は利用率が3事業所で5～10％アップしていました。コロナだけでなく、最近はアデノウイルスもよく聞きますし、これからはインフルエンザの季節にもなります。油断せず、今後も引き続き衛生面等気を付けて、みんなで元気に過ごしていきたいです。

地域生活支援の報告

レスパイトのお仕事

レスパイトのお仕事について、皆さんどんなイメージをお持ちでしょうか？

宿泊をしていることから、グループホームと似ていると思われるかもしれません。実際私も、レスパイトに異動になるまではそのように思っていました。しかし実際には少し違うことに気付きます。何が違うかというと、

① レスパイトは一時利用のため、毎日違うメンバーがやってきます。当然関わり方も変わるし、空気というか雰囲気も日によって全然違います。毎日が新鮮な気持ちです。

② 日中一時と短期入所を合わせると、多い日は10人以上のメンバーが来ます。そして職員は日勤、夜勤合わせて4～5人で対応します。なので、グループホームに比べると賑やかな状況が生まれます。職員がチームで連携して動くのも、グループホームと違うところです。

③ レスパイトはご家族にとっては休息のための事業ですが、メンバーにとっては「楽しめる場所」のようです。幸いなことに、多くのメンバーが来所を楽しみにされているようです。当然職員も楽しく仕事ができます。

他にもいろんな特徴がありますが、メンバーと楽しい時間を過ごすという、ちょっと得した気分になれるのがレスパイトのお仕事だと思います。気になった方は一度見学に来てください！

お問い合わせは、花の会短期入所事業部（TEL072-697-7031）まで。

（花の会短期入所事業部　橋本　好司）

はいびすかすの職員として

私自身、縁あって地域生活支援部門、サポートセンターはいびすかすのヘルパー職員として携わることになり、2年半が経ちました。以前に、花の会の生活介護部門の職員として勤めていたこともあり、生活介護の時には見られなかったメンバーの一面を知ることができ、日々新鮮な刺激を感じながら業務に就いています。

集団活動が中心の生活介護とは違い、はいびすかすの支援は基本的にメンバーと1対1で活動します。

メンバーに喜んでもらえるよう意識して支援を行うようにしていますが、一人ひとりがユニークでさまざまな「特性」を持っておられる方々と接していく中で、自分の思いとは違う形でガイドを終えることもしばしばあります。さまざまなイレギュラーや課題に直面した時に、職員一人では対応しきれない場合も多く、その時に同じはいびすかすの職員、生活介護やグループホームの職員や、たまたますれ違った人に助けてもらうことがあったりと、仕事を通してどれだけ自分が身の周りに支えられているかを学び、気付きました。

これからも周りへの感謝を忘れず、今を大事にして喜ばれる職員になっていけたら良いなと思います。

（はいびすかす　嶋田　宏和）

就労相談支援の報告

～　７月に入職しました　～

はじめまして。

7月に花の会に入職しました橋口正子です。現在、高槻市障がい者就業・生活支援センターにて勤務しております。入職してからあっという間に3か月が経ちましたが、少しずつ仕事に慣れてきたように感じます。

これまでは、児童養護施設や就労移行支援などで働いてきました。以前は児童やメンバーと日常生活に近い部分で関わることが多かったのですが、月に１回などの頻度で相談をお受けするという形で登録者の方と関わることが多く、頻繁に会う関係ではない中で、どうすれば効果的な支援ができるのかと、日々先輩たちに教わりながら勉強させていただいております。

趣味は推し活で、アイドルが大好きです。12月にライブに行く予定なので、すごく楽しみにしています。リフレッシュも大切にしつつ、相談に来られる皆様に納得のいく職業生活を送っていただけるようなお手伝いができるよう、自分自身も成長して行ければと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

（高槻市障がい者就業生活支援センター
橋口　正子）

７月、タイム食堂へ　２４時間テレビから冷蔵庫の寄贈がありました！

本年３月、高槻市社会福祉協議会より「読売テレビ24時間テレビ2023年度　子ども食堂・子どもの居場所支援」のイベントのメールを頂きました。タイムには以前の使用者が置いていってくださった冷蔵庫がありましたが、子ども食堂で使うには容量が不足しており、安全な食の提供には大容量のものが必要だと考えていた矢先のことでした。

どうしたら先方に訴えかけられる文章になるのか…、ここはサポステ（三島地域若者サポートステーション）利用者の方の応募書類作成のお手伝いと同様です。産みの苦しみで応募動機を書き上げ、応募用紙を投函したものの、数か月経ち、応募をしたことすら記憶の片隅から消えかけていた頃、突然、読売テレビから寄贈決定の電話がありました。

届いた冷蔵庫は以前より100ℓも大きいため、食堂内のカウンターの中に入れることはできません。以前からのものはそのまま続けて使用し、寄贈品は関係者以外立ち入り禁止の隣室に置くことになりました。目立たぬ裏方ですが、しっかりと食材や調理したものを傷めることなく保存し、安心感を与えてくれる心強い助っ人であり、夏は特に猛暑で、そのありがたみを痛感しているところです。

２４時間テレビのホームページには、子ども達とスタッフが笑顔で寄贈品を囲んでいる他団体の写真がいくつかアップされていますが、残念ながら、タイム食堂を利用される方々へのお披露目が叶いませんので、せめて地域の皆様には知っていただき、共有できれば嬉しく思います。

（子育て支援タイム食堂　湯之上　秀子）

法人の報告

花の会４０周年記念パンフレットが完成しました

実は花の会は今年、創設40周年を迎えます。（法人設立からは25周年です。）

１年前より各部署から担当者を選出して、40周年の記念にパンフレットを作成する取り組みを始めました。参加者それぞれがアイデアを出し合い、取材や写真撮影を行い、自分たちでレイアウトを考え作成しました。プロが作るようなデザインではないですが、温かみのあるパンフレットになったのではないかと自負しております。

各事業所にいくつか備えていますので、見学等でお越しになった際にお渡しできるかと思います。　（業務執行理事　成瀬　修）

理念継承研修について

花の会設立当初の想いを知るメンバー、家族、職員が少なくなってきました。花の会が40周年、法人２５周年を迎えるにあたり、改めて先輩方の設立当初の想いや法人の理念を確認し、次世代に引き継ぐ取り組みを始めています。事業所ごとに研修の時間をとり、主に山田理事長が語り部となり、職員と意見交換をしています。

花の会らしさ、花の会が大切にしていること、時代と共に変化する必要があることと、残さないといけないこと、こういった話を時間をかけて語らいながら、花の会の理念が継承されていくことをねらっています。

（業務執行理事　成瀬　修）

支援連携会議について

メンバーの支援について、事業所の縦割りによる弊害等でご希望に沿うことが難しい場面が見受けられるようになり、支援について部門間の垣根に横串を通す仕組みとして、2023年１月から開催しています。これまでの議論としては、各事業所のメンバー受入手順の共有と見直し、グループホームの空室・利用希望状況の確認、入居希望者受付手順の見直し、新規利用者情報の共有、事例や相談支援事業所からの提案について意見交換等を行いました。

組織が大きくなると、分業、専門特化といったことが起こり、内部の連携が　おろそかになりがちです。今回の「会議」の設置も、ひとりのメンバーへの対応はどうだったのかの反省から始まりました。連携不足は支援に大きな影響をもたらすため、縦割りの弊害をいかにしてなくしていくか、今後も工夫を凝らしていきたいと思います。　（業務執行理事　成瀬　修）

２０００年１２月１２日第三種郵便物承認　毎月（１・２・３・４・５・６・７・８の日）発行
発行人　関西障害者定期刊行物協会　大阪市天王寺区真田山町２・２　東興ビル４階　定価１００円